



田 畑 益 弘

WEB PAGE

太陽書房



# WEB PAGE

## 目次

1 . 一九九九年一月	5
2 . 一九九九年二月	8
3 . 一九九九年三月	13
4 . 一九九九年四月	23
5 . 一九九九年五月	39
6 . 一九九九年六月	55
7 . 一九九九年七月	76
8 . 一九九九年八月	101
9 . 一九九九年九月	129
10 . 一九九九年十月	154
11 . 一九九九年十一月	180
12 . 一九九九年十二月	207



一九九九年一月

バリウムを呑まねばならぬ腹寒き

<sup>とお</sup>杳き国の少年兵よ地球儀の蒼き部分が不意に哀しい

凍天や姿の見えぬ金属音

億だとか兆ばかりなり新聞に目を落としつつパンを齧<sup>かじ</sup>りぬ

逢ひたしと逢ふまじは振り子時計よ右脳左脳を日々揺れてゐる

寡黙なる待合室のストーヴよ

冬晴の如く床屋を出でにけり

時々は哀しくもなる人間のことになげんのこと考へてゐて

独りごと癖になりたる冬籠<sup>ごも</sup>り

乳首より氷の裸像溶けてゆく

刈りたての頭<sup>ず</sup>も冬晴の一部かな

ガラス屋のガラスガラスに冬晴るる

一月の一本道を行かむとす

寒林にブロンズの裸婦佇めり

暖炉燃ゆ赤の他人と打ち解けて

母逝きて父と二人の湯豆腐よ

てつちりは好き大阪は嫌ひなり

泪出て水つ<sup>ばな</sup>湧出て嫌な日だ

見飽きても名画は名画<sup>ふるごよみ</sup>古曆

めつむ<sup>まなうら</sup> 瞑れば目裏の闇櫓<sup>そり</sup>の鈴

かじか<sup>か</sup> 悴みてひと待つカラス哄笑す

悴んでゐて警官に質<sup>ただ</sup>さるる

寝酒してなほ寝つかれぬ夜のありぬ

アンテナも電波も揺るる<sup>もがりぶえ</sup>虎落笛

裏日本とふ言葉ありしよ雪に雪

撫でてやり飼ふはめになり<sup>すてこねこ</sup>捨仔猫

わが病魔吾のみが知る寒さかな

宇宙の果ても見得るわれらが十年の先の暮らしを案じてをりぬ

食へぬ人なほ数多ある地球にてあなたは何度宙返りする

冬眠といふこと<sup>とも</sup>羨し勤めゐて

一九九九年二月

かのひとに逢ふまじと決む かんあかね 寒茜

哀しくともわたしは泣かぬ枯木見る

セーターを抜けてにきびの顔が出る

床板の破れに黒き冬の海

麗人の毛皮の狐われを見る

つつましく生きよと寒波襲ひ来る

丈高き人をたと喩へてジャイアント馬場みたいと言ひしよこれからも言ふ

在りし日の母住まふよに思はれて三面鏡を開いてみたり

鏡台に亡母の香水いまま置く

重ね着の如きをんなのからだ肉体かな

焼芋やそら夜空よりくらまやま暗き鞍馬山

未明にて猫の入りくる蒲団ふとんかな

冬河や君生きてあれ細くとも

雪だるま並んでをりし日本海

凍つる夜の来向きむかふ人を恐れけり

凍つる夜をなにゆ糸いとに行く沓くつの音

冬蠅ゆるを宥なぐさして金を数へをる

孤立せり冬の蝶見て泪して

ただならぬわが身の芯の寒さかな

北風きたかぜ荒あぶ街角まちかどわれも絆きずな欲し

虫絶えて孤独ぎつしり耳の穴

なぐれゆく大飛球あり春早き

恩師なほ厳しく寒き頬されて

凍蝶<sup>いてちよう</sup>が陰画の如く眼に焼き付く

きつと我に何かが起こる春の海

逃げ水や喪ひしもの何々ぞ

木は枯れて待つ<sup>ほこ</sup>矛もなく<sup>たて</sup>盾もなし

八月六日、八月九日終らざる「被爆証人を捜しています」

暖炉燃ゆ猫の寝顔の恍惚に

星生れ星死ぬけふのキャンプかな

ひと責めて春いまだしき風の中

春の夜へ出してくれろと猫の鳴く

年金で暮らす父あり<sup>しみじむ</sup> 蜆汁

ささやかな金をよるこ<sup>けいちつ</sup>び啓蟄か